

文系と理系のはざままで



若

佐藤 渉*

Make a Fresh Start

Key Words : reconsideration, new start

はじめに

なにわの地に身を寄せてはや4ヶ月。中学の英語教師を目指していた自分が、今なぜ大学の理学部に???

まだまだ人生を語る年齢ではないが、自分を見つける良い機会なので、この場をお借りしてこれまでのことをちょっと振り返ってみる。

1. 英語か化学か

学園ドラマ全盛時に中学、高校時代を過ごした自分は、当然のように教師を目指し、大学受験に臨む。教師になることに何の疑問もなかったが、「さてよ、中学の先生にはなりたくないけど、何の科目で?」と、日々自問自問。当時好きな科目は化学。ただ、苦学でも無理矢理勉強したお陰で模試で点が多少とれるようになってきたのが英語。さてどっちの教員になるべきか? 巷に英会話の学校がポツポツとあらわれはじめ、「英語ができるといいなあ」という漠然とした憧れも手伝って、「英語の先生だ。」という結論に達してしまった。なんというあさはかさ。

と、いうわけで教育学部の英語科に入学した。英語が好きでたまらない連中に囲まれ、来る日も来る日もチャーター、シェイクスピア、ディケンズから、スタインベック、フォークナー。文学ばかりか、英語学、英語教育も盛り沢山。あたりまえだが、これ

でもかというくらい英語の授業が多かった。特に英語が好きという程でもなかったのに、ただなんとなく英語の授業を受けていたが、一方では、密かなチャレンジもしていた。同じ教育学部の化学科の授業をモグリで受講することである。英語教師を目指しながら実は化学への興味が捨てきれなかったのである。ただ、今でも鮮明に記憶しているが、最初にモグって聴いた授業が量子化学。「エルミート? スレーター? なんだと!」大学の化学の授業はこんなにも難しいものかと衝撃を受けた。「化学科に入らずに正解だったかも...」。

2. アメリカで

漫然と授業を受け、優秀な友人(のノート)のお陰でかろうじて単位を重ねて4年生になった。教員採用試験は間近である。ただ、英語教師になるにはあまりにも英語ができないことは自覚していた。もう少し将来のことをしっかり考える時間が欲しいと考えていたやさき、所属研究室の先生に「佐藤、留学には興味ないか?」と非常にタイムリーなお誘いがあった。同じ一年間を過ごすなら、留年よりも留学だと判断。両親にわがままを許してもらい、休学して意気揚々と8月末オハイオ州の小さな大学に向かった。「英語の勉強のやりなおしだ!」

留学先の大学では卒業を目指すわけではないので何を履修してもかまわないが、規定のGPA(Grade Point Average)を満たさなければ、即kick out(退学)されるという条件だった。この「何を履修してもかまわない。」が、この先の将来を揺るがす要因であるとは当時の自分には知る由も無い。英語の修行に来たのだから、当然アメリカ文学や英語そのものの授業の履修を登録したが、「せっかく何をとっていいのだから、ちょっと化学の授業でも聴いてみるか」と持病が再発してしまった。



* Wataru SATO
1967年1月生
東京都立大学大学院理学研究科化学専攻博士課程修了
現在、大阪大学・大学院理学研究科・化学専攻・放射化学研究室、助手、博士(理学)、放射化学、核物性
TEL 06-6850-5416
FAX 06-6850-5418
E-Mail wsato@chem.sci.osaka-u.ac.jp

結果的に化学を履修した事はGPAをかせぐ点において、まんざら無謀なものではなかった。文学の授業では一週間に一冊の文学作品(単行本で数百ページ)を終えるペースで、とても日本人の自分が消化できるものではない。授業は発言して教授にチャレンジしてなんぼの世界で、特にはじめのうちは貝のように口を閉ざしていたため、これが成績に見事に反映した。しかし、化学の授業は黒板の数式や化学式を見ていれば何をやっているのか一目瞭然。よくわかるのだ。しかも教授の授業展開が面白い。授業では学生の興味をひくように導入法がうまく考えられている。「こんなに面白いのなら、来学期は実験もとってみよう。」などと病状は悪化の一途をたどる。自分が文系で、英語の修行に来ていることを忘れかけていた。学生実験は機材の台数の関係で二人組で行うこともあったが、基本的にはひとりで行うことが多かった。楽しんだ。レポートも文学作品の感想を書くのちがって紋切り型の文章でいいので、苦にならない。授業の後の知識欲が満たされた充実感。「やっぱり化学っておもしろいかも...」

しかしいまさら化学のおもしろさを再確認してももう遅い。同級生の多くは4月から英語教員として現場に立つ。「親から一年の猶予をもらって来て、いまさら化学の道に進むなんてバカな話だ。でも興味はどんどん引かれ、もっとちゃんと勉強してみたい。どうする?」こんなことを化学の履修を続けつつ、アメリカで3ヶ月程考え続け、出した結論が、「やってみよう。あきらめがつくまで。後悔はしたくない。」だった。

3. 化学科へ

翌年6月はじめに帰国してまずやったことは、大学に復学して卒業すること。けじめをつける意味もあり、卒業論文に取り組んだ。内容は英語教育。卒論に取り組む一方で、次年度の身の振りを検討し、まずは大学の聴講生になって一年間化学の授業をとって力試しをしてみることにした。卒論提出間近の12月、都内某公立大学の理学部の聴講生試験(高校生レベルの英、数、化)を受け、翌4月からの聴講資格を得た。一方、化学の勉強をするのはいいが、これからは仕送りなしで食っていかなければならない。英語の教員免許を活かし、専門学校と中高生の学習塾の非常勤講師のかけもちで食いつなぎながら凌いでいくことにした。教育学部の英語科を卒業したことが、早速役立ったのである。

いよいよ4月から学部の授業の聴講開始。高校時代から化学だけは好きだというだけで、早々と理系科目の基礎学力がないことを思い知らされた。早速高校の数学と物理の教科書を買って独学した。独学なのでどの程度身についたかは甚だ疑問であるが、化学の授業の理解にはある程度役立ったと思う。非常勤で食いつなぎながらなんとか16単位取得することができた。聴講によって化学への興味は広がり、正式に学部からやる決心がついた。筆記と口頭試問による学士入学試験を受け、翌年の4月から正式に同公立大学の理学部化学科(夜間部)に編入が決まった。再び学部生としての生活が始まった。25歳の春、念願の化学科生になれた! 昼は専門学校で働き、夜は化学科の学生。経済的にも時間的にも全く余裕はなかったが、楽しかったことを覚えている。

4. まだまだ

大学を学部から、しかも文系から理系へ転向してやりなおすなどということを行っている者を傍から見ると、変な人間に見えるようである。確かにそれ程多くの例はないかもしれない。しかし、比較すると自分などごく普通であると感じざるをえない。特殊なお二人の方々とともに同じ生物化学の授業を受けた。ちょっと紹介したい。

Aさんはお仕事を退職されてから、生物学をもう一度きちんと勉強したいとの一念でセンター試験を受けて理学部生物学科に入学された。授業(体育を含む)だけでなく課外活動にも積極的に取り込まれていた。そんな折、不幸にも在学中胃ガンがみつかり、摘出手術を受けられ、胃の半分以上を切除することとなった。年齢的にももう復学は難しいかと思っていたが、数カ月後、教室に姿を見せた。「また、いっしょに勉強しますよ。」大分痩せたお顔ではあったが、お元気にお話していたのを鮮明に記憶している。食事は一度に食パン1枚程度で、それを1日5回摂るとのことであった。その後、通院しながら通学を続け、見事に卒業された。卒業時にはもう70歳に近かったと思う。凄いな。語彙が貧困なのでAさんの生きざまを形容する言葉が他に見つからない。今でも時々手紙で健康な自分を逆に励ましてくれる。

もうひとりの凄いな、Bさんはやはり職場を定年

退職された後、学究の念止みがたく、センター試験を受け、やはり生物学科に入学された。残念ながら特に親しくお話する機会もなかったが、博士の学位記授与式にいっしょに出席されていた。定年後に学部4年、修士課程2年、博士課程3年で合計9年間、頑張ったことになる。偶然にも妻い方々と同じ授業を受ける機会に恵まれ、自分の頑張りなどまだまだと実感した。

5. 研究室へ

学部最終学年の年、研究室に配属されることになった。化学の様々な分野の授業の中で最も興味をもったのは放射化学。原子核の崩壊現象を利用した幅広い科学の魅力にひかれた。真っ先に核・放射化学研究室を訪問し、夜間部の学生でも受け入れてもらえるかどうか相談したところ、先生は自分を快く迎え入れてくださった。与えられた卒研テーマは即発 γ 線分析による大型試料中元素の非破壊定量法の検討である。その名のとおり、土器や陶磁器などの貴重な考古学試料を完全非破壊で元素分析し、その産地や製造年代を推定するための手法の開発である。相変わらず日中は講師の仕事があるため、平日は夕方6時頃にしか研究室に来られず、研究に従事できる時間が他の学生よりも圧倒的に短い。よって短いマシントimeで多くのデータが得られる研究テーマを与えてくださったのである。やることなすこと全てが学生実験ではやったことのない初めてのことで、大分とまどったが、先生に言われるがままデータをいじくっているうちに自分が何をやっているのか少しずつ理解できるようになった。徐々に自分の考えを先生にぶつけてみることもしだし、研究の面白さが分かりはじめた。自分の生活状況(そのころ既に妻子持ち)も顧みず、「もっと研究したい」という希望だけで大学院進学を決意した。ひどいはなしである。

修士課程に進学し、卒業研究のネタがまとまりかけたM1の夏、先生が2週間程アメリカに出張する真際に、「ちょうど時間があるから論文を書いてみなさい」と言い残して行かれた。はじめての学術論文の執筆である。それまでの経験上(経歴上?)、英語で書くことに対する抵抗はあまりなかったが、はじめてなので、章の構成や論旨の展開の仕方がわからず、閉口した。それでも2週間ベストを尽くして、

帰国された先生に意気揚々と第1稿を差し出した。翌日先生から、「まっ、ちょっと見てみてよ」と言われ、真っ赤になった原稿が戻された。結果は御多分にもれずみじめなものだった。既に原形を留めていない。自分の文章の匂いぐらいはあるだろうか? 呆然としている間もなく先生から催促され、第2稿、第3稿と重ね、7~8回は添削していただいたらうか? 11月によりやく投稿することができた。この時論文の書き方のいろはについて、徹底的に鍛えていただいた。また、多少回り道はしたが、先に英語を勉強したことが間接的に研究に役立っていることをはじめて自覚したのもこの時である。

M1で卒業研究の内容に一段落したので、修士課程で残された1年間で何をやるか先生と相談した。ちょっとした議論があった。研究室の持つテーマの性格上、原子炉や加速器といった大きな施設を使っでの研究になるため、やはり、生活のための仕事を抱える自分には長いマシントimeを必要とする研究は不向きである。そこで先生は、そのころご自身が着手しはじめた金属内包フラーレンの研究を勧めてくださった。これなら実験の大部分を大学でできる。当時放射性核種を利用したフラーレン研究の例は世界でも極めて少なく、所属研究室で精力的に始まったテーマであったが、卒業研究のテーマに愛着があった自分にはまったく気が進まない話である。その旨、先生に伝えると、「どんな研究でもやりはじめればおもしろくなるものだよ。やってみようよ。」「……」フラーレン研究がはじまった。M2の春である。

6. さらに研究の深みへ

γ 線摂動角相関法による金属内包フラーレンの研究が新しいテーマとなった。「摂動?角相関?え?」というのが最初の感想で、 γ 線を使う何かの方法らしいが、どんな方法なのか、その方法でフラーレンの何がわかるのかがさっぱり分からず、途方に暮れた。また一から勉強のやりなおしである...「やりなおしには慣れているさ。」と、ひらきなおった。とにかく先生のご指導のもと、またひたすら新しい実験をし、M2の冬にはぼんやりではあるが、おもしろい結果が出つつあった。こうなるとまた好奇心が頭をもたげて来た。「もっと研究を続けたい。」こんなこともあろうかと、M2の5月に、ダメでもととの気持ちで日本学術振興会の特別研究員に申し

込んでおいた。採用されるとは全く思っておらず、不採用なら家族が路頭に迷うことになるので就職活動もしており、内定をひとつとっていた。が、M2の終わる年度末に学振から驚きの採用通知が届いたのである。後先考えず、博士課程進学を決めてしまった。ひどいはなしである。

博士課程進学後は、もう後戻りできないものと覚悟を決め、他の学生と同様にただひたすら研究の日々である。先生のご指導のおかげで発表できる成果も出て、3年間で学位をいただくことができた。また、理化学研究所での3年弱の非常に有意義なポスドク生活の後、阪大で採用していただき、今日に至っ

ている。多くの方々からの援助なくして今の自分はない。

7. おわりに

以上の経験から、文系も理系もたまたま18歳の時点で決めたあくまでも仮の方向づけに過ぎないと感じるようになった。残りの半世紀以上にもわたるであろう人生のひとつの方向を多くの方は高校生活の中で決めているのである。その是非はともかくとして、時間はかかるが「やりなおし」という選択肢もあるということを後輩たちに伝えたい。

